言説、権力、社会、そして言葉

—象牙の塔の「バベル」—

Discourse, Power, Society, and Words: the “Babel” of Sociology

佐藤 俊樹

SATOU Toshiki

Contemporary sociology is often said to be built on multiple paradigms, but there is little substance behind this assertion. New theories or methods such as Foucault's concept of power, discourse analysis, and social constructionism, are not destruction, not even reconstruction, but merely reproduction of traditional sociology. Although they reject concepts such as “subject” or “society”, through their rejection they reintroduce equivalent concepts. If we will really wish to go beyond traditional sociology, we must abandon all terms that attempt an overview of society as a whole and discard almost all attempts to explain social phenomenon. Only a small set of basic concepts, like “addressing and addressed” (J. Butler), and a few regulative concepts based on them, like “response” and “action”, can help us.

1. 貧しき花園

「社会学のマルチパラダイム状況」がいわれて久しい。さまざまな「理論」や「手法」が話題にのぼる。構築主義、権力分析、言説分析、オートポイエーシス、歴史社会学、…と、たちまち五、六個はあがる。

しかし、本当に社会学は多様化したのだろうか。

たしかに外見上は多彩になった。30年前であれば、社会学を学ぶ全ての学生が原論と学史でM. ウェーバーとT. パーソンズを学び、調査実習で調査票をもって地域を駆けずり回っていた。十数年前、私が学生だった頃でも、研究者志望ならば『経済と社会』シリーズと『社会体系論』を本棚にならべていた。あの緑と青の装丁をながめるのも私の世代が最後になるのだろうか。

古典を読まなければ社会学がわからない、などと説教するつもりはない。社会学がわかるわからないというのは、もっとはるかに残酷な選別^{テスト}である。面白い本を数冊読んで感じがつかめるかどうか。学部教育ならともかく、研究者養成レベルでは、それではほぼ決まる。数冊読んでダメならば、大部の著作を何冊読んでも身につくことはない。

その上で私はいいたい。現在の多様化はむしろ貧困化である、と。

2. 新旧のねじれ

これには二つの貌がある。

古典が消え、誰もが知っている巨大パラダイムが消えて、「理論」や「手法」が多様化していった。その結果、一つ一つに関与する人数は減っている。極端な言い方をすれば、一つの研究会ごとに「理論」や「手法」がある。マルチパラダイム状況どころか、D. リ

ースマンの言葉をかりれば、マルチ内幕情報屋の世界である。

現在、社会学の研究者養成は深刻な供給過剰にある。大学教員などの研究職ポストは横ばいなのに、博士課程修了者はふえつづけている。にもかかわらず研究者間での競争は激化していない。その理由もこの辺にあるのではないか。少人数の仲良しグループなので、その内での競争は回避される。仲良しグループ間では言語が通じないから、競争にもならない。

いわば新奇なものの無際限な増殖。それが現在の貧困化の一つの貌である。「古典を読む」というお説教も、好意的に解釈すれば、この貧困化を憂えたともいえる。その責任を相手に押しつけている点で、まさにこれはお説教なのだが。

しかし、私が気になるのはもう一つの貌の方である。新奇でないものを新奇だと思っている。その貧しさだ。

例えば、年長の研究者から「最近の若い世代の論文はわからない」とか、「あんなの社会学ではない」といった感想をよくきくが、私自身は全く逆に感じている。最近の「理論」や「手法」はわかりやすい。とても社会学っぽい。いや、バカバカしいくらい社会学っぽいのだ。

二つの貌はもちろん連動している。中身が新しくない分、術語の新しさが強調される。ただ、それをあげつらってもしかたがないし、年長者が「自分たちにわかるように説明しろ」というのもおかしい。もしコミュニケーションに責任があるとすれば、話す側と話される側、双方にあるはずだ。

それゆえ、ここでは、最近の「理論」や「手法」の代表的なものをとりあげて、なぜ私が安易さを感じるのか述べていこう。

3. 「権力」と「社会」

その最もわかりやすい事例は、いわゆるフーコー的権力論だろう⁽¹⁾。

M. フーコーの権力論が従来の権力概念とどういう関係にあるのかは、すでに盛山和夫によって詳細に検討されている [盛山 2000]。権力論内在的にいえば、これに特につけくわえることはない。

フーコーの権力論は従来の社会学が権力を発見しなかったところに、どんどん権力を発見していった。多様化の代表的な事例といえるが、実は、いかなる条件をみれば「権力」があるといえるのかは今なお明確ではない。しばしばいわれるのは「抵抗」の存在だが、その中身ははっきりしない。抵抗の存在自体はあらゆる権力の必要条件である。抵抗がなければどんな権力も発見できないからだ。

したがって、問題は「抵抗」の中身にある。もしこれが当事者の主観の上であれば、ウェーバーの権力概念と同義になる。当事者の主観でないとしても、まだ十分ではない。当事者が意識せずとも特定の方向へ動かされるのは、旧来の社会学でも認めている。例えば、E. デュルケームの「社会的事実」とはまさにそういうものだ。

実際、フーコー的権力論の語り方はデュルケミアンとよく似ている。すでに幾人もが指摘しているように、フーコーの「権力」には二種類の定義がある。第一の定義では、権力は個人を主体化するものとされる。それに対して、第二の定義では、権力とは「多様な力関係」や「複雑な戦略的状況」とであるとされる。

この地点でフーコー的権力論はすでに破綻しているともいえる。だが、冷静に考えれば、社会学者なら誰でもよく似た術語を一つ知っている。「社会」である[佐藤 2000a]。社会は個人をつくりだす／社会は個人の集まりである。社会は社会関係をつくりだす／社会とは社会関係の全体である。社会学者もこうした二重体として「社会」という語を使ってきた。

それゆえ、私はフーコー的権力論をとりたてて奇異だと思わない。フーコー的権力論は社会学的である。あえていえば、社会学のいう「社会」と同じくらい、その「権力」は奇異である。

4. 内閉する思考

フーコー的「権力」とは「社会」のことである——もし本当にそうだとすれば、フーコー的権力論は一見社会学の外部のようでいて、実は内部にある。さまざまな差異化が図られているが（社会を権力とよびかえること自体差異化である）、もちろん、だからこそ社会学の思考圏内にある。

フーコー的権力論にはややきつい言い方かもしれない。もう少しよりそった形でいえば、「多様な力関係」や「複雑な戦略的状况」という定義には、本当は固有の意味がある。これは権力を社会と同義にしない止め金^{ストップバー}なのだ。けれども、この第二の定義にしたがえば、権力が同定不能になるので[盛山 2000]、実定的に語る際には、（力関係の）装置やメカニズムといった形に対象化されざるをえない（→5.）。それによって権力は主体かつ客体の二重体となり、第一の定義も吸収されるのだが、その瞬間に止め金もはずれて「社会 the social」と同義になる。

それゆえ、この転形は実はきわめてcriticalなものなのだが、そこで本当に見落されているのは転形それ自体ではない。すぐ後で述べるように、「社会」もまたこういう転形をへたものなのだ。正確に言えば、その意味で、フーコー的「権力」と社会学のいう「社会」は同義なのである。

よく考えればこれも不思議ではない。フーコー的権力論が本当に社会学の外だったとしたら、もっと激烈な反発がおきていただろう。たんにフーコー的権力論がアカデミックな社会学から追放されていただけでない。フーコー的権力論に魅かれる人々自身も強い不適應を起こしていたはずだ。きつい言い方をすれば、お互いに社会学者（のふり）ができる程度の違和でしかなかったのだ。

私はそのこと自体が悪いとは思わない。問題はむしろ論理の衰弱の方である。社会学が何をやってしまうのか、どんな語り方をしてしまうのか。それこそフーコー的な言い方をすれば、社会学の実定性はいかにつくられているのか。

そこに敏感であれば「権力」と「社会」の同義性には容易に気づくはずだ。その上で、新しい術語系を戦術的に使うのであれば何も異論はない。けれども、フーコー的な権力概念をふりかざせば従来の社会学を乗り越えられるというのなら、まちがいだ。その点を一番明確に指摘したのはおそらく内田隆三である[内田 1975]。率直に言えば、20年以上前のこの論文をさらにこえて、フーコー的権力と社会学の文体を測定したものはまだない^②。

そこに私は閉域を感じる。新しいものが次々でてくることによる断絶ではない。新しくないものを新しいと信じることによる内閉。自分が外部にいるかのように思うことで内部

に閉じこもり、かつ閉じこもっていることをも忘れてしまう。それこそが私のいう貧困化である。

5. 「遍在」の罟——言説と構築

M. フーコーの名につらなるもう一つの手法、いわゆる言説分析にも同じことがいえる⁽³⁾。G. スピヴァクは「全てを構築されたものとよぶcall everything as a constructionのが反本質主義だ」という考え方は、社会的なものthe socialが本質だとみなすことにつながる」と述べているが[Spivak 1993-1994:294=1999:87、訳文一部変更]、これはきわめて的確に事態を射抜いている。

少し丁寧に説明しよう。

言説分析やフーコーの権力論では、言説や権力が遍在するという。これは実は厄介な定義なのである。言説や権力が遍在するとすれば、全てが言説や権力になる。それ以外のものがもちこめなくなる。言説や権力でない何かが一つでもあれば、そこには言説や権力がないわけで、遍在するとはいえなくなるからだ。

例えば、言説や権力の「装置（布置）」が語られるが、もし装置（布置）が言説や権力そのものだとするれば、たんに冗長なだけである（言説や権力のたんなる分布だという逃げもあるが、遍在するという以上、全言説空間なり全権力空間を記述しなければ分布もわからない）。もし装置（布置）が言説や権力でない何かとすれば、遍在という定義と矛盾する。かくして装置（布置）は呪語^{マジックワード}と化す。

これはそのまま「構築主義—本質主義」にもあてはまる。本質主義には、表面的に観察される水準と潜在的に決定している水準という二つのレベルがある。論理的に言えば、こういう二つの水準を使って思考するのが本質主義なのである⁽⁴⁾。一方、構築主義が何かというのは要約しづらいが、構築されたものconstructionという概念で考えるかぎり、構築されたものは構築するものを召喚してしまう。それは論理的には本質主義である。

「全てを構築されたものとよぶ」としても、ここから逃れられるわけではない。「装置（布置）」と全く同じことで、全てが構築されたものだとするれば、構築という概念が冗長になる。冗長にしないためには、構築するものという水準をどこかに密輸入せざるをえない。本質に本来「かくれた」という含意がある点でいえば、これこそ典型的な本質主義である。

その意味で、あのスピヴァクの言葉は、構築主義が注意すべき危険というより、論理的に帰結してしまう事態なのである（→10.）。念のためいっておくが、「いや私は社会も構築されたものと考えている」といっても、決定する水準が一段ずれるだけである。P. ブルデューの「構造化する構造／構造化される構造」をもちだしても、同じことだ。

言説や権力や構築といったアプローチがまちがっているのではない。構築する水準をおいているのなら、それをはっきり認めた上で議論すればいい。「本質主義だ」「反本質主義だ」とラベルを貼るのではなく、どちらの本質が正しいのかを争えばいい。それが政治的に意味をもつ場面はたくさんある[加藤 2001]。

6. 社会学とは何か

重要なのはその先である。

以上からわかるように、この事態はフーコー的権力論や言説分析に固有なものではない。もちろん構築主義のオリジナルでもない。権力も言説も構築も「社会」と同じく、その外部を否定する。外部を否定しながら、「遍在」「全ての…」という形で全体を語ろうとする。それが必然的に発生させる事態なのだ。

それゆえ、その並行者はいわゆる社会学の内部でもすぐみつかる。例えば、スピヴァクはフーコーの権力論を救い出すために、「換喩catachresis」や「可知性intelligibility」といった契機をもちこんでいる[Spivak 1993=1999]。これはN. ルーマンの「コミュニケーションシステム—行為システム」という術語系と同じ操作である。さらに、ルーマンは「全体社会Gesellschaft」（への言及）を、スペンサー—ブラウン代数を援用して「想像的値（虚数）imaginaer Zahl」とする[Luhmann 1997:866]。これは対象化にともなうメタレベルの無限化をあつかっている。

もう少しくわしくいえば、ルーマンは「システム」とよぶことで、外部が立たないにもかかわらず、それを「内部」だと自ら発見してみせる。それによって例えば他の議論を本質主義として批判しつつ、自らはその批判を回避する。一段巧妙になっているが、これはルーマンがスピヴァクよりよく考えているのではなく、社会学に居直っているからだろう。

言説分析にもっと近い先行者も当然存在する。K. マンハイムの「部分イデオロギー／全体イデオロギー」である。マンハイムの「全体イデオロギー」も外部を否定する概念であり、必然的に同じ事態にぶつかる。かつて私は「言説分析の知識社会学的弱毒化」と述べたことがあるが[佐藤 1998:89]、いわゆる言説分析や構築主義がマンハイム的な知識社会学とどこがちがうのかは、もっと真剣に反省されるべきだろう。

遍在の問題もすでにあつかわれている。二つの平面をたてるから本質主義になる。ならば、平面は一つのままで二つの水準を見出せばよい。そこで、平面自体の特性を表わす別の変数^{パラメーター}を導入することが考えられた。これが「曲率」である[内田 1980]。曲率とは平面上の二点間の距離の定義であり、一通りではない。裏返せば、距離がどう定義できるかで、その平面の特性が同定できる。私は曲率の導入がメタレベルをおいていないとはいえないと考えているが（例えば曲率のちがいをどう記述するのか？）、少なくとも本質主義から最も遠い解とはいえる⁽⁵⁾。

要するに、社会学はずっとこの事態を考えつづけている。むしろ、考えつづけることで社会学の学的同一性が保持されているのだ。柿本・嶋中が指摘しているように、「社会」という概念とは本来そういうものである[柿本・嶋中 1998]。

社会なるものが素朴に信じられているわけではない。いや、率直に言えば素朴に信じている人もかなり多いが、ある程度考えれば、社会なるものの同定しがたさにはすぐ気づく[佐藤 2000a]。にもかかわらず、社会という概念は生きのびてきた。社会の存在を否定する。あるいは、外部のなさを宣言する。そういう操作を通じて、メタレベルで社会にあたるものが召喚されるのである。例えば、全てを構築されたとよぶことで、社会the socialが本質として発見されるように。

その反復が社会学なのだ。それはいわば全体性を否定することを通じて別の全体性を密輸入する。いわゆるフーコー的権力論も言説分析も構築主義も社会学の再生産であり、再生産だと気づかずに再生産しているとすれば、最も正統的かつ忠実な再生産にほかならない。

7. 本のなかの歴史

だから、現状は「マルチパラダイム」からはほど遠い。百家争鳴というより、社会学的思考の圏内にとどまり、適度にすみわけている。社会学というアカデミズムの制度の内部で、平和共存している。

その現実を最もよく表わしているのはいわゆる歴史社会学である。多様化という視点から見過ごされがちだが、この10年間で一番量的に成長したのは、フーコーの権力論でも言説分析でも構築主義でもない。歴史社会学というジャンルだろう。

ここでいう「歴史社会学」はもちろん、佐藤健二が議論しているようなものではない[佐藤 2001]。わかりやすいえば、「市民」とか「近代家族」とか、いや「規律訓練」でも「生-権力」でもいいのだが、それら西欧の歴史上の出来事（とされるもの）をそのまま日本にも発見する。そういう研究群である。

その特徴を一言でいえば、ブックッシュbookish。別に文字資料だからブックッシュになるわけではない。これらの研究は二重の意味で本に閉じ込められている。まず、ウェーバーでもアリエスでもフーコーでもいいが、話題になった研究を鵜呑みにする。彼女ら彼らの本に書かれたことをアプリオリに事実だと信じるわけだ。その上で、それとそっくり同じものを日本語の刊行物のなかに発見していく。プロテスタンティズムの倫理や「子どもの誕生」や「抑圧」を。

こうした歴史社会学がスタートしたとき、私は正直面喰らった。歴史に対してあまりにもナイーブに思えたからだ。私はかつて「ウェーバーを研究するのは社会学だが、ウェーバーのような研究をするのは社会学ではない」といわれた。十数年前がそれが社会学の常識だった。

だが、いくつか読み聞きすると、疑問は氷解した。よく知っている別のジャンルと同じ匂いがしたのだ。それは学説研究である。学説研究も既知の図式を別の文脈の上に移し変える。例えばマルクスをウェーバーのなかに発見したり、パーソンズをデュルケームのなかに発見する。もっと現代的な流行を発見してもよい。本のなかに本を発見する、いわば本のタマネギ。だからブックッシュなのである。

実際、日本社会学会の大会プログラムでも、学説研究と称する発表が減少するにつれて、歴史社会学を冠する研究発表が増加している。図式主義と本のなかで世界が閉じている点で、歴史社会学はかつての学説研究の後継者である。

ここでもまた閉域におつかる。新しいものがでてくることによる断絶ではなく、新しいものを新しいと信じることによる内閉。いわゆる歴史社会学は「ウェーバーのような研究」をするようにいて、実際には「ウェーバーを研究する」にすぎない。

社会学だけを責めるのは酷なのかもしれない。これは八〇年代以降に流行した学説言説に広く見られる通癖だからだ。例えば柄谷行人の一連の議論は、文脈自由な超越的視点を瞬間的に導入しつつ、内容的に「超越的視点はない」ということで、超越的視点を導入してないかのようにそおう。けれども、例えばゲーデルやウィトゲンシュタインやフッサールが……と並列した時点で、すでに不完全性定理や言語ゲームや現象学が文脈自由な意味をあたえているのであって、論者自身もいつかそれに気づかざるをえない。そうになると、今度は別の超越的視点を瞬間的に導入してきて、同じゲームをくり返す。

これは実は「批評」とかテクニスト論に一般的に見られる[佐藤 2000b:195]。全体性を否

定することで全体性を密輸入する。そのおかげで、外見上つねにパラダイムは更新され、新たな思想的課題が発見される。フーコー的権力論や言説分析もその反復であり、歴史社会学はその反復をより凡庸に反復していく。

8. 貧しさと全体性

この内閉を解く途は二つある。

一つは、反復を認めた上で、社会学に回収することだ。要するに、フーコー的権力も言説分析もその他も社会学と同じだと認める。そうすれば、少なくとも自分が外部にいるかのように思うことで内部に閉じこもり、かつそれを忘れることはなくなる。多様化という名の貧困化は終わりにできる。具体的な社会問題においては、社会本質主義が有効なケースも多い（→5.）。

しかし、私にとってはこれは解決ではない。

フーコー的権力論や言説分析の躓きをもう一度思い起こしてほしい。その根源は権力や言説が遍在するという定義にある。外部がなければ、本来、全体を語ることができない。にもかかわらず、外部がないといいながら、「遍在」や「全ての…」と全体的な何かに言及しようとする。それが呪語化や本質主義の密輸入を招く。

ならば必要なのは、全体を語らないことではないだろうか。つねに特定の何かを具体的に語る。そのための言葉をさがす。フーコーの権力論にしても言説分析にしても、その違和はもともと安易に「社会」を立てることにむけられていた。だからこそ、「社会」という語をさけてきた。その途をもっと先に進むことはできないのだろうか。

私は貧困化の向こうに、ある絶対的な貧しさを感じているのだろう。多様化が隠蔽しているのは、貧困化ではなく、本当はその貧しさである。それは一言でいえば、全体性を語ることの気持ち悪さ、味気なさだ。

わかりやすい言い方をすれば、全体性は定義上、すべての人、すべての対象に関係する。だから、社会をもちだせば、自動的に語るべき理由になるし、語ったことになる。語るべき何かがなくても、社会をもちだせば語れてしまう。

それは深い弛緩をもたらす。言葉が緊張感をうしなう。意味はあらかじめ承認されることで、決定的に失われるのである。全体性にしても本質にしても、語る意味をあらかじめ確保することで、かえって殺してしまう。貧しさというのは結局そういうことだと思う。意味をあらかじめ確保したり、承認してもらおうとしてはいけないのだ。

もちろん、語る意味を殺さない途は他にもある。全体性を密輸入したからといって、語りが全て緊張感を失うわけではない。だが、それでも何かが失われることにかわりない。全体性によりかかる言葉は、さまざまなものを押しつぶしていく。素朴に言えば、本当に語りたいことを行き過ぎ、がちがちに固め、ゆっくり殺していく。私はそれが嫌なのだ。

社会学が社会という全体を密輸入することで同一性を保持してきたとすれば、これはそのまま社会学のあやしさでもある。あたかも社会学でないふりをして社会学を再生産するのは、そのあやしさに対して最もまずい対処の一つだと思う。

9. 連鎖する言葉

そこに決定的に欠けているのは、全体を語ることへの抽象的な反省ではない。反省が必

要なのはたしかだが、例えば柄谷の一連の現代思想ゲームがそうだったように、これはしばしば簡単に別の全体性を召喚してしまう。論点の一段ずらしになるか、何もいっていないか、どちらかにおわってしまう。

特定の何かを具体的にどう語るか。それは最終的には言葉と事物との別の関係をさぐることである[佐藤 1997→2002]。そこで従来の術語の多くは失われる。いやちがう。全体性を語らないためには、術語のほとんどを自らを失わなければならないのだ。その上で何が、何を、語れるのか。

まだ断片的にしか手がかりはないが、何人か気になる人がいる。

例えば、J. バトラーの「行為体agency」は、S. A. クリプキとかなり近いところにあるように思う⁽⁶⁾⁽⁷⁾。バトラーは「わたしは一四歳の頃より一連のユダヤ人の思想家や作家の著作を読んでおり、…今日のクィア理論について知っていることよりも、それらの書物について知っていることの方が多い」と述べていたが[Butler 2000=2001:201]、たしかに彼女の思考はタルムード的ユダヤ教を感じさせる。断っておくが、だからといって彼女が（特に日本語でいう）ユダヤ教的だというのはない。

ミシュナー、すなわち口伝トーラーへの最初の解釈するテキストであり、第二の解釈するテキストたるタルムードによって解釈されるテキストは、次の言葉からはじまる。

「夕方はいつからシェマアを唱えるのか。祭司らが入り供物を口にする時刻から、第一当直の終了時まで。これはラビ・エリエゼルの言葉である。しかし、賢者たちは、夜半まで、という。ラバン・ガマリエルは、夜が明けるまでに、という。…もしそうであるならば、賢者たちはなぜ夜半までにといったのであろうか。人を罪から遠ざけるためである。朝はいつからシェマアを唱えるのか。青と白を見分けうる時以後に。ラビ・エリエゼルはいう。青と緑を。日の出までに、と。ラビ・ヨシュアはいう。第三時までに。第三時に起きるのが王の子らのならわしであるから。その時刻以後に唱える者として、別に何も失うわけではない。律法を読むものと同じだからである。」（ペラホート1.1-1）

口伝トーラーとその解釈は、すなわち、タルムード的ユダヤ教の実践は、つねにだれかの言葉の引用である。解釈＝実践は以前の解釈＝実践に言及するだけでなく、以後の解釈＝実践に言及されることではじめて解釈となる[福留・佐藤 1996]。後からくる解釈が前にあるはずの意味をつくりだす。それはときに最初の問いをほぼ反転させるようにさえ見える（「その時刻以後に唱える者として、別に何も失うわけではない」）。

だからこそ、責任という言葉をつかえば、言葉はそれを受ける者に責任を出現させる。つねに誰かの言葉の引用だからこそ、言葉の意味はまず引用者において発生する。だからといって、後から解釈する側があらゆる意味を創造するわけではない。後につづく解釈は前の解釈に呼びかけられている。少なくとも前の言葉がなければ後の言葉もない。

これはユダヤ教の解釈＝実践にかぎらず、あらゆる発話、あらゆる行為一般にいえる。行為の意味は後から、いわば他者からやってくる。『行為』は別の…『行為』に到達する、いいかえれば接続（言及）することで、その『行為』を『行為』たらしめ、かつそれによって自らも接続（言及）されたことになって、『行為』たらしめられる。つまり、そこで互いに『行為』となりあう」[佐藤 2000a:43-44]。

10. 主体と責任

つねにだれかの言葉の引用であること。引用はその言葉に導かれ、かつその言葉を導く⁽⁸⁾。あえて受動と能動という言い方をつかえば、100%の能動性はないが、デュルケームの「契約の非契約的基礎」のように、能動の基盤に受動があるのでもない。導くことと導かれることは一つなのだ。

これを「文化決定論」や「社会決定論」というのは不適切だと思う。「文化」や「社会」が引用の外部に、あるいは引用の以前にあるわけではない。むしろ引用は引用される言葉を導くことで、以前の言葉を現在化＝活性化actualizeさせる。そして、その引用も言葉であるがゆえに、その後で引用されることで、現在化＝活性化actualizeされる。その意味で、確定的な過去の何かはない。現在しかないのだ。

『行為』の他者依存性というのは、自己/他者の『行為』の意味を他者/自己が確定することではない。もちろん、他者/自己の『行為』の意味を確定する『行為』自体が確定的に存在しえないのだが、それ以前に、他者の行為に接続することは根源的な受動性をもつのではないか。」[佐藤 2000a:47]

だから「主体」という概念はできればサケたい。もちろん受動/能動という区別も立てない方がいい。いわゆる近代的な主権の主体sovereign subjectだけでない。「個人の主体性と社会による決定」という社会学的図式も適切ではない。まず第一に、導く一導かれるにおいて、社会という全体は立たない。あえて社会学的に言えば、あらゆる言葉が現在化するし、現在化されない言葉はなかったにひとしい。喩えていえば、引用がその都度その都度集蔵体archiveをつくりだすのだ。

第二に、社会なるものが外に立たないと本当は同義だが、導く一導かれるにおいて、能動が何割、受動が何割という分割はできない。この二つは同時にある。したがって、責任を考えるとしたら、この二つが同時にあるとした上で、なおかつ責任が成り立つかどうかを問うべきなのだ。「発話行為を主権的な主体から解き放すことは、行為体の、そして最終的には責任の、別の概念をうちたてる」[Butler 1997:15=1998:20、訳文一部変更]。法学基礎論や平等論で、責任を事実としての選択に基礎付けようとするときさまざまな問題がおきことはすでに知られている[瀧川 1998-1999][井上 2002]。導く一導かれるから、直接（例えば「個人と社会」といった全体性の図式を経由することなしに）、責任へつなげられるかどうかを考えなければならない。

11. 貧しさの向こう側

あえて社会学風に言えば、ここで問われているのは「行為」の概念そのものである。行為の概念から変えなければ、「主体」をどうよびかえても意味はない。スピヴァクのあの言葉は最終的にはそこを指しているのだと思う。バトラーの『触発される言葉』の、私にとって到底「読んだ」といいがたい文章に強く感じるのも、そこへ向かう苦闘である。

そのさらに先、責任となるともっとむずかしい。導くの上ではなく、導かれるの上に責任を立てられるのか。それとも導くと導かれるがともにあることが責任という考え方を要請するのか。何でもかえられる（選べる）からではなく、何でもかえられる（選べる）とはいえないから、責任があるのか。

事物に言及する術語の多くがそこで失われる。その上で、いくつかの言葉をあえて固定し、語る意義を見出し、なおかつそれらの言葉の意味を後へ開いていく……。行為について、いわんや責任について私はまだほとんど何も考えられていない。もしかすると、私もまたいつか他の全体性を召喚してしまうのかもしれない。変に悲観的になるつもりはないが、適度な警戒心は忘れたくないし、欠かせないだろう。

それでも歩いていきたいのだ。私は。ゆっくりとでよいから。

【注記】

- (1) 以下「いわゆる」を「今の日本の社会学でそういわれている」という意味で使う。
- (2) [柿本・嶋中 1998]がほぼ同じ作業をしているが、この本のなかでは[内田 1980]は言及されていないようだ。
- (3) 「いわゆる」でない言説分析については[遠藤 2000]参照。
- (4) 「事実に近い言説（構築）/事実に遠い言説（構築）」という基準をたてれば、事実性という別の平面が導入される。これも本質主義につながる。
- (5) [内田 1980]は「権力」と「社会」をともに遍在する概念として発見しているので、より複雑だが、論理の経路はほぼこういう形だと思う。
- (6) 「行為体agency」については、[竹村・上野 2001][竹村 1998]など参照。
- (7) 竹村和子がKripkeに言及しているが、私の解釈とは少しちがうようだ[竹村 2000]。「アイデンティティ」「空虚」「過剰」「システムの因果性」といった言葉は、私には社会的に聞こえる。クリプキは可能性や世界の全体を考えない地点から考えはじめていると思う[佐藤 2000a]。むしろ[竹村・上野 2001]での語りの方がしっくりくる。
- (8) [Butler 1997]では「呼びかけられ呼びかける addressed and addressing」と述べてあるが、その内容を的確に理解している自信がないので、ここでは自己流の表現を使わせてもらう。なお、[佐藤 2000a]でButlerへの言及がないのは不勉強によるものである。

【文献】

- Butler, Judith 1997 *Excitable Speech*, Routledge. = 1998 竹村和子訳「触発する言葉」（序章）『思想』892, 7-46。
- 2000 “Ethical Ambivalence”, Garber, M., Hassen, B., & Walkowitz, R. L. (eds.) *The Turn to Ethics*, Routledge. = 2001 竹村和子訳「倫理の両義性」『批評空間』Ⅲ(2), 200-208。
- 遠藤知巳 2000 「言説分析とその困難」『理論と方法』15(1), 49-60。
- 福留恵子・佐藤俊樹 1996 「解釈連鎖としての＜社会＞ ユダヤ教の言説空間をめぐる」未発表。
- 井上彰 2002 「平等主義と責任」佐伯啓思・宮本光晴・松原隆一郎編『新しい市場社会の構想：信頼と公正の経済社会像』新世社。
- 柿本昭人・嶋守さやか 1998 『社会の実在と存在』世界思想社。
- 加藤秀一 2002 「構築主義と本質主義」『ジェンダーがわかる』朝日新聞社, 10-13。
- Kripke, Saul A. 1972 *Naming and Necessity*, Harvard University Press. = 1985 八木沢敬・野家啓一訳『名指しと必然性』産業図書。
- イ・ヨンスク 1995 「固有名詞の矛盾」『現代思想』23(4), 219-227。
- Luhmann, Niklas 1997 *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp.
- 佐藤健二 2001 『歴史社会学の作法』岩波書店。
- 佐藤俊樹 1997→2002 「騙しの無限連鎖をこえて」佐藤俊樹『00年代の格差ゲーム』中央公論新社。

- 1998 「近代を語る視線と文体」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会, 65-98。
- 2000a 「『社会システム』は何でありうるか」『理論と方法』15(1), 37-48。
- 2000b 「透明な他者の後で」『大航海』35, 116-122。
- 盛山和夫 2000 『権力』東京大学出版会。
- Spivak, Gayatri C. 1993-1994 “Subaltern Talk”, Landry, D. & Maclean, G. (eds.) *The Spivak Reader*, Routledge. = 1999 吉原ゆかり訳「サバルタン・トーク」『現代思想』27(8), 80-100。
- 1993 “More on Power/Knowledge”, *Outside in the Teaching Machine*, Routledge. = 1999 高橋明史・師玉まり訳「権力／知、再論」『現代思想』27(8), 102-137。
- 竹村和子 1998 「『触発する言葉』序文訳者解説」『思想』892, 4-7。
- 2000 「アイデンティティの倫理」『思想』913, 23-58。
- 竹村和子・上野千鶴子 2001 「ジェンダー・トラブル」『ラディカルに語れば……』平凡社, 158-253。
- 瀧川裕英 1998-1999 「責任の意味と制度(1)(2)」『法学協会雑誌』115(6), 703-773、116(11), 1701-1761。
- 内田隆三 1980 「＜構造主義＞以後の社会学的課題」『思想』676, 48-70。
- 上野千鶴子 2001 「構築主義とは何か」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 275-305。

(東京大学総合文化研究科)